

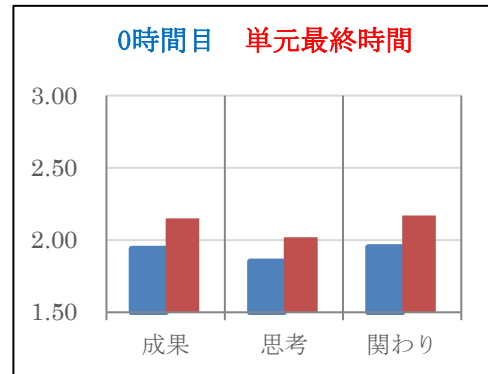
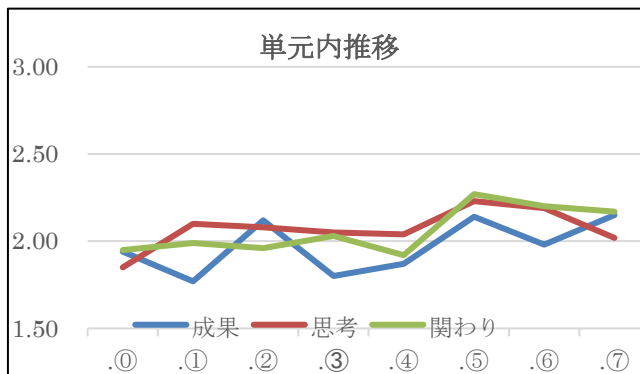
1 単元名 目指せマット柱！仲間と一緒に全力稽古だ！

(器械・器具を使つての運動遊び・マットを使った運動遊び)

2 児童の変容

(1) 情意面 (形成的授業評価をもとにした授業評価から)

男子16名 女子12名 計28名



- ・「成果」の数値は増減を繰り返しているが、単元前よりもやや高くなった。これは、児童が遊びに取り組むなかで、試行錯誤を繰り返したことによるものであると考えられる。繰り返し挑戦する中で、ポイントをつかみ、「できた」と感じた児童の割合が増加したことがうかがえる。しかし、中には「できなかった」と感じている児童もいる。今後の授業において、友達との関わりを大切に、教師が支援していく必要がある。
- ・「思考」の数値も単元前よりも単元最終時間の方が高くなった。知識・技能の習得に重点を置いた単元前半は横ばいであったが、思考をはたらかせる学習を重視した単元中盤～後半は数値がやや増加した。これは、児童同士が互いの運動遊びを見合い、気付いたことを伝え合うことで、自身の目標を達成するために、思考しながら練習に取り組むことができていたことがうかがえる。最終時間においては、数値に減少が見られたが、これはこれまでの運動遊びで、できるようになったことを見せ合う時間であり、課題解決に取り組む時間ではなかったからであると考えられる。
- ・「関わり」の数値も単元前よりも単元最終時間の数値が高くなった。5時間目に高い数値を記録したのは、自身の目標を達成するために、グループの友達と見合い、アドバイスし合いながら学習したことが要因であると考えられる。しかし、学級全体を見渡すと、互いにアドバイスをし合っている児童はそれほど多くなかったように思える。したがって、単元を通して児童同士が関わり合いながら遊びに取り組めるように、手立てを工夫していきたい。

(2) 技能面

	①小さなゆりかご			②前回り		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	15	10	3	8	20	0
単元後	15	9	4	11	17	0
	③大きなゆりかご			④後ろ転がり		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	15	9	4	2	17	9
単元後	11	14	3	8	17	3
	⑤かえるの足打ち					
	できる	もう少し	できない			
単元前	6	22	0			
単元後	11	15	2			

- ・単元前と比較して、前回りと後ろ転がりにおいて数値の上昇が見られた。技のポイントを確認したうえで、転がる技を取り入れた遊びをサーキット形式で毎時間行ったことが、技能向上の一要因として考え

られる。また、単元後半の課題解決学習の際に、自分の目標達成のために効果的な稽古の場を選んで練習できたことがうかがえる。

- ・後ろ転がりについては、達成率がそれほど高くない結果となってしまった。低学年の体育は、遊びであるが、技の達成率を向上させるために単元計画の工夫をしていく必要があった。

(3) 思考面

問 後ろ転がりの動画を見て、どんなところが良かったですか。(複数回答可)			
単元前		単元後	
・手をマットについて押したところ	1 1	・手をマットについて押したところ	1 6
・静かに素早く回ったところ	7	・静かに素早く回ったところ	6
・最後に立つところ	4	・おしりを遠くについたところ	6
・初めにお腹を見たところ	2	・最後は最初の姿勢に戻ったところ	5
・手を耳の横にしていたところ	2	・足を揃えて転がっていたところ	4
・マットを蹴っているところ	2	・手を最後までついていたところ	2
・手の力を使っているところ	2	・真っすぐ転がっていたところ	1
・腕と足を上手く使っているところ	1	・ひざを伸ばさずに回ったところ	1
・背筋がピンだったところ	1	・体がしっかり丸まっていたところ	1
・最後のポーズ	1	・転がるときにおへそを見ていたところ	1
・おしりを遠くについたところ	1	・初めは手が耳の高さになっていたところ	1
・丸まっていたところ	1		

- ・後ろ転がりの知識が定着し、技能ポイントを踏まえた取り組みや学習についての記述が増えた。児童が技能ポイントを意識し、自己の目標達成に向けて必要なことを考えながら学習することができた成果であると考えられる。
- ・おしりを遠くにつくことや、マットに着手し、押すことの大切さには気付いて運動できたが、スムーズに転がるために体を丸めることや、目線に気を付けることに気付いた児童は少なかった。今後の学習において、見る視点をより細分化し、技能ポイントとして学級で共通認識できるように取り組んでいきたい。

3 成果と課題

低学年のめざす姿

見合い、伝え合う活動を通して、自分のめあてに向かって繰り返し取り組む児童

【成果】

- ・様々な運動をする場を用意したことで、児童が意欲的に遊びの活動に取り組むことができた。
- ・用意や片づけの時間を毎時間記録していったことで、児童が全員で協力して取り組もうという気持ちで活動することができた。
- ・友達同士見合い、対話がしやすくなるように、話型や技のポイントが書かれたミニ学習版を用意したことで、「〇〇になっていいよ。」や「もう少し〇〇した方がいいよ。」などと、伝え合うことができた。また、「がんばれ！」や「その調子！」など、友達を励ます声がけをすることができた児童もいた。

【課題】

- ・活動の中で、友達同士の関わりが停滞してしまう場面が見られた。関わりを豊かにするために、それぞれの遊びの動きに掛け声（リズムなど）があると、停滞することなく、友達と関わりながら活動することができた。また、自分から声を掛けることが苦手な児童には、ハンドサインで伝えたり、技のポイントを指でさして伝えたりできるような支援が必要であった。
- ・今回は、二人組のペアの活動でなく、チームで取り組む活動を取り入れた。しかし、全員で一人の遊びを見るといった活動ができていなかった。見る場所や、視点をより明確にして、活動に取り組ませる必要があった。
- ・2年生のマットを使った運動遊びでは、「後ろ転がり」ができることが目標であったが、達成率はそれほど高くなかった。遊びであるので、後ろ転がりだけに特化した授業の展開が難しく、他の遊びに取り組む児童も多く見られた。したがって、単元の前半は遊び（自分で考えたものも含める）をメインとした場づくりをする。単元後半は、身に付けるべき技を習得できるような場づくりをするといった単元計画の工夫を検討していく必要がある。